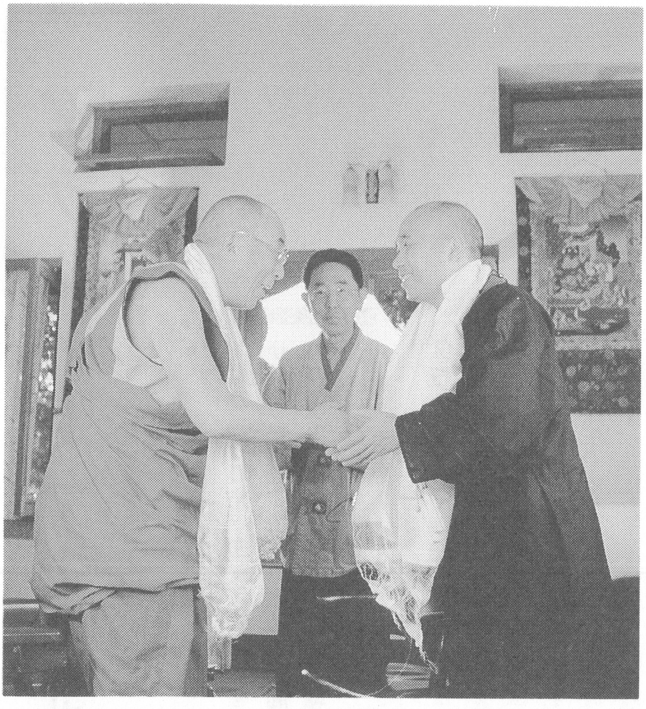


妙の光（たえのひかり）

通刊57号 **復刊36号**
2001年12月12日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜〒953-0011
TEL 0256-77-2025

特別号

① ダライ・ラマ十四世
インタビュー詳細　2ページ
② 第十二回フェスティバル安穏
パネルトーク概要レポート　22ページ

（特別号の形にしましたので、巻末の行事案内以外、通常の内容はお休みさせていただきます）

ダライ・ラマ十四世
インタビュー詳細

先の「妙の光」三五号で経緯をお伝えしましたが、今年の九月二六日、インドのダラムサラにおいて、チベット仏教最高指導者ダライ・ラマ一四世に住職がお会いしました。その際のインタビューの詳細をご報告します。聞き手は韓国ソウル大学で仏教哲学を教える沈（シム）教授です。

ダライ・ラマ十四世

一九三五年、チベット北東部のタクツェル村で生まれる。三八年、ダライ・ラマ一三世の生まれ変わりと認定され、四〇年に即位した。四九年、中華人民共和国が成立。翌年、人民解放軍が東チベットに侵攻し、以後長い紛争になる。中国共産党常務委員会副委員長を務めた時期もあるが、五九年、インドに亡命し、亡命政権を樹立した。六〇年からダラムサラに住む。中国との和平交渉など非暴力主義に立った活動が評価されて、八〇年、ノーベル平和賞を受賞した。

五歳で即位したダライ・ラマ一四世にはもちろんふつうの少年時代はなかった。仏教教典の学習に励む毎日だった。しかし、月に一度故郷の美味しい食べ物を持って母親が訪ねてくるのを最大の楽しみにする「ふつうの子供」でもあった。機会に興味があって、分解しては遊んでいたという。「探求心が旺盛だったかもしれない」と楽しそうに少年時代を振り返る。（毎日新聞二〇〇一年一〇月二九日付紙面より転載）

日本からのおみやげを差し上げる、中央がシム教授

シム教授：昨晩は伝統芸能研究所のホールですばらしい芸能を堪能させていただきました。そこで最初の質問ですが、この亡命中のお立場でどうやってこうしたチベット文化を保護し、活性化させているんでしょう。

ダライ・ラマ：中国による古文書の発掘結果によると、チベットには六〇〇〇年前から人が住んでいたとされています。現在も、誰でもがチベット語を含むチベット文化に触れることができると思います。地理的環境のおかげで、かつてチベットでは仏教が全盛だったこともありますが、チベット文化やチベット人の生活様式を今なお、目にすることができるのです。環境、地形、長い歴史のおかげで、独自のチベット遺産やアイデンティティが残ってるのです。

こうしたチベット遺産や生活様式の根底には、心の平安、つまり慈悲の精神があります。ですから、チベット文化には、我々の心や人生において正しい態度を培おうという可能性が秘められているのです。環境やあらゆる生物、他人や人類すべてに優しく接するとい

うことです。

私たちは、チベット文化は単に世界有数の古い文化だというだけでなく、昨今の世界情勢にも通用する文化だと考えています。チベットは中国の解放運動という名のもとに大きく変化しました。特にこの四〇年間で、チベット国内では文化の破壊というとても悲しい出来事が起きました。こうしたことから、亡命者となったとき、チベット文化の保護に責任と憂慮を感じました。本来、私たち国民は自分の文化や精神を愛しています。しかし、時に、自由が制限されているためにそれを実践するのが困難なこともあります。ということはこれらを守るのは自由な国が果たすべき役割なのです。

自国の文化は教育（現世の教育と宗教教育の両方）によって守られます。ここ四二年間ずっと、我々は精神的仏教教育と現世の教育を推進してきました。インドにチベットの独自の学校を作り、あらゆる地域に現在八〇以上の学校があります。こうした活動がチベット文化を保護する大事な方法です。

いまのところ、とても成功していると考えています。でも、いつまで文化を守りきれるかは分かりません。冒頭にも言ったように、私の最大の関心事はチベット文化の保護です。つまり、平和な社会、それぞれの政治的状況に同情できる社会を守りたいということなのです。

この話に関連して言うと、私は中国からの独立を求めているわけではないのです。たとえ支配されていようと解放されようと、チベットは大きく変わりました。もっと大事なのは、世界は変化しうるということなのです。こんにちの世界、現実は国や大陸レベルでお互いが相互に依存して存在しているのです。

これは新しい現実です。環境、経済、その他あらゆる分野の保護という点では、完璧な独立（自立）をしているかどうかは、もはや関係ないのです。ですから、私がすべきことは、チベット文化や美しいチベットの環境を守ることなのです。

シム教授：あなたは子供たちへの教育を通じてチベット文化を守り、最後は独立の代わりに自治権を得た

いとお考えですね。でも昨夜、チベットの友人に宴会の席で乾杯するときは「ランゼン！(独立)」と言うと教わりました。現在のチベットの人たちは、あなたが目指している不完全な自治権ではなく、中国からの完全なる独立を望んでいます。

また非暴力こそがあなたの推し進める政治的目的を達成できる唯一の手段であることを、どのようにして人々に説得していくつもりですか。民衆はあなたの意思に従っていくでしょうか。

ダライ・ラマ：非暴力に関しては説明がしやすい。非暴力、あるいは非暴力的方法は人間らしい方法ですし、長い目で見れば、少なくとも副作用の恐怖はないわけで、より効果的なのです。もし、暴力があれば、一方は満足するでしょうが、長い目で見れば、予期せぬ別の問題を引き起こすかもしれないのです。

チベットの例でいえば、我々の非暴力的アプローチや非暴力的闘いのおかげで、第三者的な世界が我々を支援してくれましたし、中国本土の中国人でさえ、チベット問題を多少でも知っている人は我々に同情や関心を寄せてくれ、彼らが結束をしてくれるようになりました。これは、我々が非暴力的方法を採ったからだと思っています。

ですから、長い目で見れば、非暴力は道徳的に正しいだけでなく、もっとも安全で建設的な方法だと思います。チベット人も、一般的にはこの考えを支持しています。例えば、チベット青年組織は大きな組織ですが、構成する各組織は非暴力であるからこそ、支持しているのです。

さて問題は二点目の独立です。青年組織の公式的なスタンスは完全なる独立を目指すことです。ですから、彼らは私の方法と全く相容れないのです。

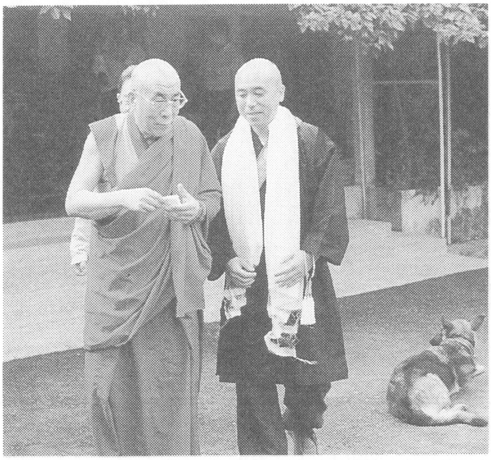
シム：そうですね。これは私も聞きたかった点です。

ダライ・ラマ：現時点では、独自の文化遺産を持ったチベットという国家は死にかけています。これは単純な問題ではありません。長い歴史を持った国家が存亡の危機にあるのです。これが現状です。ダライ・ラマとして、私は伝統的にある種の責任を持っているだけでなく、信者であろうとなかろうと、仏教徒であろ

うとなかろうと、ほとんどのチベット人は私を信用してくれています。彼らは私に期待しているのです。ですから、私には、彼らを守り、救い、仕える道徳的責任があるのです。

事が重大なので、私はチベット人や私の友人にはいつも、私の責務はチベット、チベットの環境、チベット文化を守り、古代からの文明を保存していくことだと話しています。これが私の使命だと思っています。将来的にはこれはチベット人にかかっています。私には決められません。

亡きパンデット・ネールはかつてインド議会で、最終決定はチベット人がすべきだと言ったことがあります。私もそのとおりだ思います。民主主義や道徳主義の観点では、社会や国家の将来は、人々にかかっている、関心を持つ人々自身にかかっているのです。私が決めることではありません。



庭先を案内される住職

ですから、私の使命はチベット文化と環境を保全することなのです。実際、チベットは中華人民共和国の一部である限り、チベットの環境を保全することは中国本土にとって、洪水などの点でもとても有益なのです。チベットの環境破壊や大規模な森林伐採のせいで、中国人は影響を受けているのですから。

文化遺産の問題もあります。チベット仏教の信念などチベット文化が存続し、保存されれば、中国の文化や霊性が豊かになるという大きなメリットがあるのです。

もう一つは中国政府の問題です。政府は、チベットを経済発展させたがっています。そして、政治的安定については、中国政府の最大の目的は安定と統一です。ですから、私の方法こそが、真の意味での安定と統一

を達成する最良の方法だと私は信じています。

シム教授：多様な文化を受け入れることですね。

ダライ・ラマ：そうです。中国政府がチベット人に対し、なんらかの権限や信頼を与えれば、中国政府に対して、チベット人も人間として、前向きになるでしょう。現在は、中国政府は抑圧してくる状態です。チベット人が少しでも怒りや憤りを持てば、抑圧という形でかえって来るのです。

銃弾の下での安定や統一なんてことは、表面的です。本当の安定は、内側から出てくるものでなくてはならない。経済発展のためには、安定と統一が基本です。ですから、私は安定と統一、経済発展を一番に望んでいるのです。しかし、ここの青年組織やチベットにいるチベット人は過去の経験上、中国社会に対して信頼を完全に失っているのです。ことは複雑なのです。中国政府が現実を見つめようとしたとき、真の自治権こそが中国最大の問題を解決する方法であると理解し、もっと現実的な方法で真の安定と統一をどう図っていくかを話し合うようになるでしょう。そうなれば、完全な独立を望むチベット人を説得できるのです。

先ほども言ったように、世界は変化しています。感情ではなく、知性や知能を使うべきです。

シム教授：いまテロが世界中の問題です。ニューヨークでテロが起きたとき、あなたがブッシュ大統領に宛てた声明を読みました。あなたは「暴力は別の形の暴力を生み出す。正しい決断をして欲しい」とおっしゃってましたね。

またこのテロの時代、アメリカの政治学者は文明の崩壊と言ってます。以前にはタリバンによってバーミアンの仏像が破壊される事件がありました。これをあなたはどうお考えですか。これは仏教で言うところの「宿命的な天罰」なのでしょうか。

こうしたアメリカでのテロ、そしてアフガニスタンやイスラム圏の現状。テロ支配に対してどんな解決策をお考えですか。あなたは、今なお、非暴力で平和的な方法を受け入れなさいとおっしゃいますか。

ダライ・ラマ：大きな問題です。まず私は世界がテロの時代だとは思いません。また非暴力的方法が単に

受身だとは思いません。絶対に違います。

あなたの質問はたくさんの問題を含んでいます。私は基本的に、一般的には世界が暴力的になっているとは思いません。テロの時代ではありません。これらのテロリストはほんの一握りの人たちです。しかし、こうした人たちは、この地球上で人間性が進化し、二本足の人類が誕生し、人間が歩行するようになって以来、存在しているのです。いつの世もこうした人はいるのです。

昔との大きな違いは、使用する武器や方法です。科学や技術の進展で、少数の悪人たちでも大破壊ができるようになったのです。ここが大きな違いです。

世界中で，特に自由世界では、これらテロリストに対抗して、結束しています。これはもちろん、正しいことです。テロリストは目的が何であれ、行為自体は恐ろしく、思考は消極的で、考えがたいことです。彼らは無実の人たちの命を考えていない。これは恐ろしいことです。ですから、テロリストに世界が対抗するという動きはとても正しい。ただどう対抗するかが問題なのです。

テロリストは暴力を使用している。第一にこの場合ターゲットは見えない。どの国、どの地域、どの地点が対象なのかが分からない。あなたの服に小さな虫がいると思ってください。虫ごときで、洋服を燃やしたりしないでしょう。そんなことするのは、愚か者か、狭い視野での考えです。洋服を脱いで、どこに虫がついているのかを見て、虫をつかんで捨てればいいのです。

これと同様に、教育や場合によっては対話を通して、非暴力的な方法はありえると思っています。まず会って、なぜ怒っているのかを相手に聞くのです。そして対話し、なぜ彼らが暴力を使ったのかを理解する。時間がかかるし、難しいかもしれない。

もし報復手段として暴力を使うなら、例えばアフガニスタンでは多くの無実の人が被害を受けるでしょう。そして、悪い人たちはどんな方法かで、隠れるか脱出を図るでしょう。ですから今こそ平和のために、知性と慈悲が必要とされる時期なのです。私は、アメ

リカ人、アメリカのリーダーは自由と平和の喜びを心から知っていると信じています。彼らが正しい行動をしてくれることが、私の希望であり、祈りです。

あなたは、タリバンによるアフガニスタンの仏像破壊の話をされましたね。もちろんこのニュースを聞いたとき、世界中、特に仏教界の人たちはとてもショックを受け、悲しみに浸りました。そのとき私は、仏教サイドとして「破壊行動への報復は正しくない」と声明を出しました。仏像破壊はもちろん意味のないことですし、おろかな行為です。でも、すんでしまったことです。

これは、宗教を持っている人たちのなかには、唯一の宗教、つまり真実は一つだという考えを持つ傾向があることに起因しています。でも人間社会のなかでは実際、いくつも宗教があり、真実もいくつもあるのです。宗教領域に多面性があるのは基本です。私自身、個々人が唯一の宗教、唯一の真実を持つことはとても重要だと、周りにはいつも話しています。たとえば、私は仏教徒です。ですから、私にとっては仏教が唯一の宗教であり、唯一の真実です。個人的には、唯一の宗教、唯一の真実という考えはとても妥当性があるのです。

しかし、複数の人と一緒にいるとき、この考えはもはや妥当性を持たないのです。キリスト教の人たち、イスラム教の人たちと一緒にいれば、たとえ相手が三、四人であっても、そこには、複数の真実や宗教が存在するというのが現実なのです。ですから、宗教的伝統の多元性はとても大切だと思います。たくさんの宗教が現にあるのですから。

実際、全人類が仏教徒になることはできないのです。同様に、キリスト教徒やイスラム教徒にもなれません。世界の主な宗教は、伝統や哲学が異なるにもかかわらず、人間性に貢献する可能性を持っている点では共通しています。そこには共通の実践もあります。どんな宗教も、愛、慈悲、許し、忍耐、満足、自己修養といった共通のメッセージを我々に伝えてきました。つまり、土台や果たす役割は同じなので、宗教間の協調を進めることは可能ですし、大切なのです。

私が仏像破壊のニュースを聞いたとき、とっさに頭に浮かんだのは、イスラム社会と仏教社会やキリスト社会との間で、相互理解や相互交流が足りないことが原因だということでした。アフガニスタンには、完全に孤立したままの人もいます。それゆえ、彼らは他の宗教に対し、行動を起こしたのです。事件を聞いて、私はまずこのように思いました。

アフガニスタンのイスラム教徒が仏教について知識があり、世界を広い目で見ていれば、仏教は人間性を追及する重要な宗教の一つだということに気付いていたはずです。仏像を破壊すれば、仏教社会を傷つけるだろうと理解してくれたはずです。でも、彼らは孤立しているので、他人の感情は気にもとめないでしょう。だから、こんなことが起きたのです。

シム教授：宗教や文化の多元性を認めるというあなたのお考えに関して、私が次に聞きたいのは、文明人と呼ばれる人たちのなかには、唯一神が世界を統治すると信じ、独自の正義を持ち、宗教や文化の多元性を認めない集団もいるということです。その中でどのようにすれば、忍耐、慈悲、愛といった精神的な姿勢を持ち、教育していけるでしょうか。他の価値観や他人に対し、無知、怒り、嫌悪でいっぱいの一般人には、何が実践的な方法でしょうか。あなたはいつも「自分よりまず他人」とおっしゃいます。しかし一般人は「他人よりまず自分」なのです。

ダライ・ラマ：はい、これは人間の価値を向上させるため、私が実践していることの一つです。我々が直面している苦しみや問題は、基本的に人為です。ですから、我々の心は自己中心的なのです。そこで日常生活のなかで、家族レベルで、地域レベルで、あるいは個人レベルでの感性がいかに大切かということを知る必要があります。

慈悲のような建設的な感性、対話をする精神、和解や許す気持ち、心配や思いやりの気持ち、これらの感性は個々人の幸せだけでなく、家族や地域、国家、国際的な幸せにもつながります。

一方、憎しみ、報復、欲張りといった感情もあります。これらは我々の心に潜む自然な感性なので、押え

ることはできないと考えがちです。これらは当たり前のことだと思っていますが、私は、間違っていると考えています。

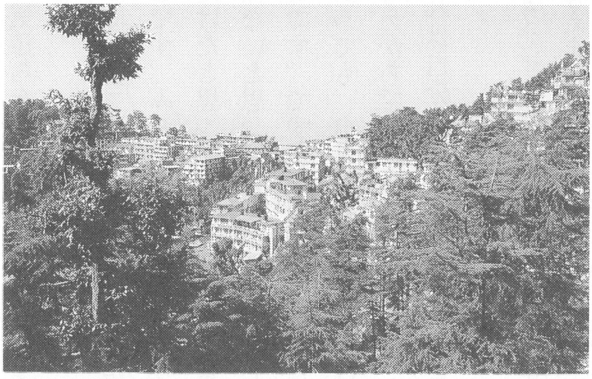
感性がいかに大切か、我々は気付くべきです。そうすれば、個々人の感性を変えることができるのです。瞑想をする必要はありません。瞑想は、宗教を持っている人間、信者のためにあります。しかし自分自身を自覚することは、信者だけでなく、すべての人に大切なことです。

すべての人が幸せな人生、幸せな家族、幸せな地域を持っているのですから、これは全人類に共通の課題です。ですから、信者であろうとなかろうと、異論はないはずです。人間の感性を変えることは、教育によって可能だと私は信じています。

シム教授：これは、知性の教育ではなく、情緒教育ですね。

ダライ・ラマ：いやいや知性を使うのですよ。知性を使って、消極的な感性を壊すのです。いったん確信すれば、消極的な感性は自然に薄らいでいくのです。心の平安について慈悲が有効だと確信すれば、自制心が芽生えてきます。知性を最大限に使うべきです。ソーシャルワーカーやセラピスト、心理学者や他者の精神的健康に関わる職種が求められ、また社会や学校で犯罪が増えているのは、家庭内や社会の中で慈悲の心が足りないからです。これは研究の上でも明らかになっています。医療の分野でも、消極的感性に起因する病気もあります。

慈悲の感性を持てば、健康的になります。科学的根拠もあります。学校や社会のなかで、この事実をもっと広めるべきです。感性に興味を



山の斜面にへばりつくようなダラムサラの町

持たせる一つの方法です。これらは教育によってなされることなのです。

そして同時に、別の側面もあります。経済的にお金持ち、大金持ちもいます。他方でとても貧しい人もいます。一八世紀、一九世紀には、民主主義で自由な国々でさえも、搾取がありました。しかし革命のおかげでこうした状況は変わりました。社会主義や共産主義を信じる国では、これらを変えようとしている国々もあります。たいていは成功していませんが。

しかし、貧富の差は世界レベルで存在し、同じ国内でも個人レベルで存在する問題です。この問題を話し合う必要があります。でなければ、解決しません。貧しい人がいる一方で、世界には、たぶん韓国もそうでしょうが、先進国の中には過剰消費の社会もあるのです。

韓国はそうなのに、北朝鮮では、幼い子どもたちは食料がなくて苦しんでいます。南の人はお金持ちなのに、北の人は日常生活用品さえもない。そうなると、ねたみや欲求不満が出てくるのです。ですから、こうしたことをふまえ、気持ちを変えていかねばならないのです。

もう一つは、我々は「私」と「かれら」は完全に別だと考えていることです。みんな自分の幸せや痛み苦しみは自分のことだけだと思っている。自分が一番だから、あなたに関係ないと思っている。他人の苦しみや幸せは二の次なのです。ですから、慈悲は他人に対しては良いことであっても、自分自身には良いわけでも必要でもないと考えがちです。

シム教授：でもそれは自分自身にとっても良いことだと。

ダライ・ラマ：そうです。しかし人間は，自己中心的な方が有益だと考えます。他者への慈悲や思いやりは、自身の幸せであり、自身の利益でもあるのです。我々は外見にとてもこだわります。もし人間を社会的な動物として分析してみれば、いかに力を持っていようと、慈悲がなければ幸せになれないことが分かります。日常生活では、家や家具、施設、食料や衣服が必要です。これらは一人の人間が発明したのではありま

せん。人間の生活の基本は社会なのですから、他者に依存することで未来があるのです。

特に現代社会では、好むと好まざるとによらず、経済や環境の問題はグローバル化しています。世界は一つなのです。ここには、「私達」とか「彼ら」という考えはなく、我々の将来は他者にゆだねられているのです。他者を思いやることは、自分自身を思いやることでもあるのです。他者を思いやらず、他者の財産を破壊したり、痛みを与えたりすれば、あなたが苦しみ、敗者となるのです。これが現実です。他者の財産を思いやることは自分自身の将来にも有益なのです。

慈悲の実践についてですが、他者を思いやることの意味を考えれば、自身の心の中に内なる力が湧いてくるでしょう。これはあなたにも勇気や力を与えてくれますから、結果を恐れることはありません。もし、自分のことだけ考えていたら、心が狭くなってしまいます。心が狭くなると、ささいなことでも我慢できなくなるのです。他者のことを考えるとき、心が広くなり、自分自身の問題はちっぽけで、気にならなくなるのです。

私も参加しましたが、アメリカのワークショップにいたある科学者の発表によれば、「私が、私の、私に」といった言葉をよく口にする人ほど、心臓発作の危険性が高いそうです。自己中心的で、自分のことばかり心配する人は、テンションが高くなるのです。健康だって害します。ですから、教育が必要なのです。こうやって、人々の消極的な気持ちや自己中心的な考えを改善していけるのです。

シム教授：チベットの人たちは今でもあなたを、哲学者、王様、神政の長と見なしています。一方で最近のあなたは、民主主義社会に移行して政治的、精神的な影響力を放棄しようとしているように私には思えます。チベットの一般人は、あなたが議会に対する影響力を放棄し、ただの僧侶になることを受け入れると思いますか。

ダライ・ラマ：一九六〇年か、六一年頃、チベット社会での憲法の素案作りに携わりました。そして一九六二年に、憲法の基本的な骨子ができました。その頃

はすでに亡命者の社会で、ほとんどがチベットからやってきた人たちでしたから、みんなショックを受けました。一九六三年に、憲法の素案が完成し、ダライ・ラマの力は廃止できることになったのです。さらに一九六九年には、ダライ・ラマの制度が存続すべきかどうかは、チベットの人々しだいだという公式見解を出しました。

一九九二年、チベットが自由を完全に得られれば、私の権限をすべて選挙制度に基づくチベット政府に渡すということを表明しました。一九六〇年代からのこの一連の流れは、いろんなレベルでの民主化への動きなのです。チベット社会では、みんな民主主義を愛しています。経験があるかないかは別問題ですが。

みんな民主主義について話し合いをしています。かつて、上級官僚は私が候補を推薦し、議会で選んでいましたが、今年から私が推薦しなくなりました。投票が行なわれるようになったのです。チベットには政党はありませんが、アメリカ大統領のように個人が立候補するのです。投票で数名に絞られ、最後は一人に決定するという方法です。

一九九二年のとき、私は一度権限を渡したら、通常の政治活動は行なわないことを表明しました。一〇年、二〇年、三〇年先かは分かりませんが、もちろん私がリタイアするときは来るべきなのです。私はリタイアしなくてはなりません。人権と宗教協調を進めることが私の使命であると、常々表明しています。私は生涯をかけてやりたいと思っています。チベットの自由についていえば、現状では制限があるのです。

シム教授：ありがとうございます。あなたの立場はよく分かりました。最後の質問です。あなたはノーベル賞受賞者です。韓国の現在の大統領もその数年後に受賞しました。韓国は現在二つに分裂していますが、国民は統一を願っています。チベットの人々が独立を望んでいるように、我々は統一を望んでいるのです。チベット人と韓国人が同じような状況にあるという観点から、韓国人に対してメッセージをお願いします。

ダライ・ラマ：似ている点もありますが、違う点もあります。韓国のケースは、最初に外部からの影響が

ありました。南北ベトナム、東西ドイツのように他からの力によって一つの社会が分裂したものです。しかし、原因がどうであれ一つの社会が分裂した、これはチベットのケースとは異なります。我々は亡命社会ですから

東西ドイツは力ではなく、市民運動によって結果的に幸せな形で統一しました。ベトナムの場合は、そんな具合にはうまくいかなかったものの、結局は統一しました。ですから、韓国も時間の問題です。

韓国は統一しているのですが、イデオロギーやシステムが違うだけなのです。でも、北朝鮮のイデオロギーや経済はもはやうまく稼動するとは思えません。これは明白です。誰でも知っていることです。いくら指導者に権力があっても、一つの社会を完全に制圧することはもはや不可能です。ですから、平和的な統一を願います。これが唯一の方法です。さまざまなレベルで個人的な交流がとても大切なのです。その間、忍耐と決意が求められています。

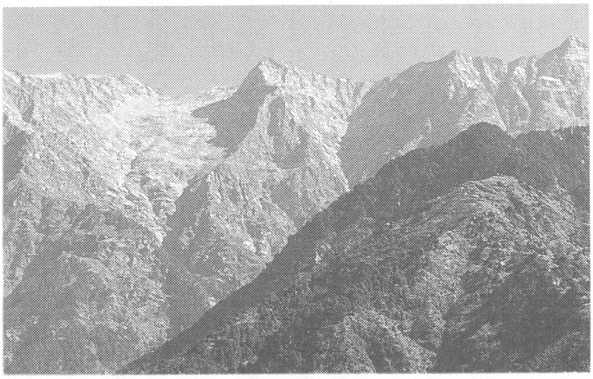
シム教授：ありがとうございます。もう少し質問を。基本的な質問です。あなたは今なお、仏教でチベット独立が果たせると信じていますか。独立できないのは、自治権や独立を勝ち取るために現実的な力を蓄えることをせず、じっと耐え、非暴力の方法しかない仏教のせいだと批判する人もいます。仏教徒のせいで、ヒマラヤの自分達の土地が独立できなくなったと言っているのです。この批判に対して、あなたはどう答えますか。

ダライ・ラマ：我々国民の全エネルギーと時間が一つの分野に注がれてしまい、教育のような領域は完全に無視されてきたきらいがあります。その意味では、そこに関係があると思います。もし、仏教について理解があれば、教え、哲学、コンセプトなどですが、それらを理解していれば、そういった消極的な考えには至らないと思います。

仏教によって、違う地域から寄り集まったチベット人たちが結びついているのです。政治的には、ここ何世紀もチベットは分割されてきました。チベット領土は中国の支配下にあり、ユンナンやシチュアンなど、

チベットはいろいろな支配のもと、分裂されました。西の部分、中央部、そしてカム地域だけはチベット政府の支配下にありました。それにも関わらず、チベットは一つでいられました。これは、仏陀のダルマに起因するのです。

チベットの歴史をみれば、チベットの学者たちの多くは、チベット政府支配の地域の出身者ではないのです。ですからダルマのおかげで、チベット国家が存続したのです。大きな間違い、自治権を失った一番の原因は、外の世界との交流が不足していたことなのです。そして、現代教育をないがしろにしてきたせいなのです。



ヒマヤラに続く山

一九二〇年代の文献によると、ダライ・ラマ一三世は一九一三年以降、チベットの学生をイギリスへ留学させていたようです。最初の学生は残念ながら早い時期に亡くなったのですが、計画はうまくいったので、第二陣、第三陣と継続的に留学できたのです。このことによって、自然に外の世界との交流が芽生えたのだと思います。

しかし……（テープ中断）もっと外の世界で何が起きているのかを知ることができたら、マハトマ・ガンジーがインドで独立運動を指揮したとき、自然に我々は親密な関係を築くことができたでしょう。我々の気候はとても寒いので、みんな家にとじこもって、外を見たり、手を広げることをしないのです。

シム教授：ところで最近、中国本土のチベットの若者たちは現在の科学製品を好み、民族衣装ではなく、ジーンズをはき、オーディオセットから流れる西洋音楽を聞いているのをご存知ですか。彼らは完璧に西洋化されてしまい、インターネットやテレビなどの科学

技術の虜になっています。こうした変化をどうみていらっしゃいますか。生物工学による人間クローンなどの科学は好意的にご覧ですか。昨今では、細胞や遺伝子一つから人間ができてしまう世の中です。

ダライ・ラマ：これは複雑な問題です。技術の進歩についてはもし、ユーザーや個々人の文化に対する価値を高めるきっかけになるのなら、何の異論もありません。他の文化や生活様式に触れることができるのですから。でも、自分のアイデンティティは保ちつづけなくてはいけません。それに、どんなに国家や社会が豊かな伝統を持っていても、個人レベルでみれば知識や経験もないのです。

日本、中国、インドの例ですと、自国の文化遺産に造詣が深い国民なら、何の問題もありません。失うものは何もない。情報の流入を止めることはできません。それを阻止するのは愚かなことです。大切なことは個々人が自身の伝統を理解することが重要です。

もし、伝統に悪い点があれば、それを守り通すことは愚かです。しかし真の価値を持っているのなら、もっと努力して守っていかねばなりません。

遺伝子などの科学知識の分野については、正しいとか間違っているなどと私の意見を述べるのは難しいです。技術自体は中立です。どう使われるかによるのです。何のためにどういう思惑で使うのか。もし、大切な思惑で良い目的があるのなら、これらの技術は人類や世界にもっと便益を与えてくれるでしょう。有害なら、もちろん悪です。

ですから、遺伝子技術や生物工学も、病気治癒の目的なら良いことです。しかし、生きる権利を無視した、道徳や責任問題にからむ場面も起きています。これは深刻です。これらの問題は、他の問題とも深く関わりあっているのです。これ自体をいいとか悪いとかは言えません。

シム教授：ありがとうございます。最後の質問です。二一世紀になり、古い文化が破壊されるといった事態に直面し、それでもなお、世界が協調できるという希望をお持ちですか。人類の将来について、どうお考えですか。

ダライ・ラマ：前向きです。二〇世紀の変化をふまえると、二〇世紀はじめから終わりとでは、前向きな変化がたくさんあります。戦争や平和は二〇世紀はじめには、五〇年、六〇年代でも、七〇年代であっても、戦争をすることで最終決断を下そうと、多くの人が考えていました。しかし、二〇世紀の終わりには、こうした考えは完全に変化しました。

また二〇世紀のはじめには、全体主義こそが社会を変え、平等な社会になると信じていました。個人の自由や創造性は犠牲となっていたのです。今では、この考えは間違っているとされています。人間は自然に、個人の自由を求めているのです。個々人が自由に創造性を発揮することによって、各領域で進歩がおきうるのです。

ここに証拠があります。前のソビエト全体主義体制は武力や核兵器ではなく、平和運動や市民運動によって変化してきたのです。フィリピンでも、チリでも同様です。これらはすべて、平和的な市民運動によって動いたのです。これは大きな変化だと思います。そして、環境問題も同じです。二〇世紀はじめには、環境保護や、地球保護への配慮や知識はありませんでした。今では、そうした政党も設立されているほどです。

科学と精神性については。一九世紀から二〇世紀はじめにかけて、科学と精神性は全く別個のものだと人々が考えたのです。科学知識や主には脳についてですが、心についての研究が進み、心の問題のなかに、記憶や感情が含まれるようになったのです。瞑想やさまざまな経験によって、脳内が化学変化を起こすことは今では明白になっています。

第一次大戦、第二次大戦など、他国に対して戦争をはじめるとき、国民は質問もせずに戦争に加わりました。ベトナム戦争では、アメリカは再び国民を送り込みました。コソボ紛争では、EUとNATO（ナトー）が軍事行動にたずさわりました。しかし人々の思いは共生の精神へと、地球レベルでの大きな変化が起こりつつあります、中国の共産主義者は今、新しい道を模索すべき時に来ています。

一世紀も続きましたが、マルクス主義は変わってき

ているのです。中国共産主義者も現実に即した新しい考えを受け入れようとしています。現実は劇的に変化しているのです。これは、前向きな変化です。科学技術のおかげで、いろんな体験もできるようになりました。時に、人間の摂理とは離れたものもあります。そのときには、原点に立ちかえればいいのです。

言い換えると二〇世紀に我々が経験したことは痛みを伴う経験でしたが、そのおかげで相互交流が生まれたのです。今は二一世紀です。私は基本的に楽観主義者です。人間は有能的に将来を見つめ、そして広い視野を持っています。ですから、困難や苦しみにも打ち勝てると思うのです。人間の将来に何の問題もないという意味ではありません。人類が存在する限り、何らかの問題は存在するのです。しかし、第一次大戦や第二次大戦のように、何百万人もの人類を巻き込むような大規模な戦争はもう起きないと思っています。

シム教授：ありがとうございます。最後です。

ダライ・ラマ：最後の質問が三つも四つもありますね。

シム教授：ええ、プロデューサーがぜひこの質問をしてほしいと。いつ、あなたの土地に戻られるのですか。母国へ戻ることについても楽観的なのですか。

ダライ・ラマ：もちろん。チベット人はみんなそうです。いつか、我々の地を目にすることができるといつも信じています。しかし、チベットの現状を見れば、希望はないと思うかもしれない。破壊、制約、環境破壊などなど。

我々の首都ラサでは、いま人口の八五％が中国人なのだそうです。中国人が全くいない地域もありますが、山深く、寒いところです。中心地では、中国人の人口が毎月増加しています。鉄道も引くそうですが、中国人は間違った方法でチベットと接しています。チベット人には制約や圧力をかけてくるのです。中国の政策は現実を抑圧しています。こんなことで、問題が解決できるでしょうか。

シム教授：なのになぜ楽観的でいられるのですか。

ダライ・ラマ：地域に目をむけると、確かに希望はありません。しかしチベットの問題は、私は半分冗談

でいつも、市民戦争や災害ではなく、中国政府は正式な招待のない訪問客だと表現しています。ですから、チベット問題は中国の進歩にかかっているのです。

中国がどんなに力を持っていようと、世界のなかでは単に一国にすぎません。世界の流れにのって、自由や民主主義、情報の自由化、言論の自由、信仰の自由などが認められるべきです。これらは世界的な傾向なのですから、遅かれ早かれ、中国はいずれ、受け入れなければならないでしょう。情報や現実は、いつまでも抑圧できるものではありません。

今日の中国では共産政党がこれに気付き、国民には公表せずに世界に追いつこうとしています。共産政党は賢いです。権力を失わずに、現実に即して変化していこうとしているのですから。

シム教授：とても実践的な人々ですね。

ダライ・ラマ：中国は変化の真っ只中にいます。二一三〇年前と比べれば、すでに変わっています。中国はこれからもっと変わっていくでしょう。民主主義という世界的な流れに従う時期が必ず来ます。そうすれば、チベットの将来は明るいのです。中国人の間でさえも、チベットを支援しようという動きがあります。我々は、中国からの独立や分離を望んでいるわけではないのです。ましてや、中国に敵意を持っているわけでもありません。中国の文化や国民を敬い、非暴力に徹しているだけなのです。

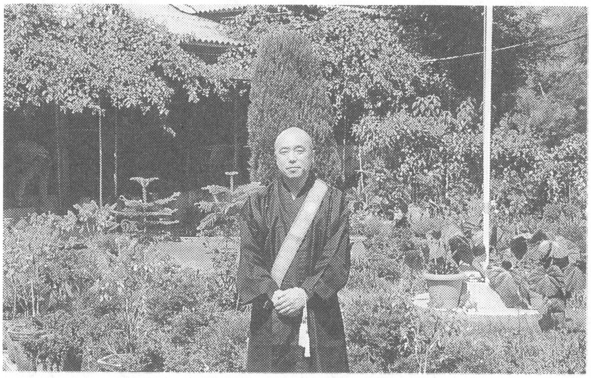
チベットについて知識を持った中国人の多くは、我々を支援し、中国政府に批判的です。知識層や作家といった人たちの視点はとても重要です。中国人作家や研究者、文化人のなかには、チベット文化やチベット仏教、我々の問題解決方法について関心を持っている人がいます。私は、解決に向けて相互に交流したいと思っています。ですから、中国人の支援はとても心にしみます。こうしたことからも、私は楽観的に考えています。

シム教授：現実に、あなたは、中国人が八五％、チベット人が一五％しかおらず、大切な文化遺産がすべて破壊されたラサへ戻られるわけですね。

ダライ・ラマ：仏教僧侶としては、中国人、インド

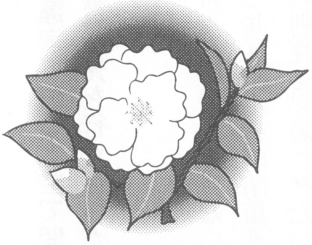
人、日本人、韓国人、モンゴル人、アフリカ人、すべて何も違いがありません。チベットの精神性、特に仏教に対して、あるいはチベット文化に対する中国の態度しだいで、もし中国人がチベット文化について、チベット宗教の考え方について正しい知識を持っていたら、多くの中国人はチベット仏教のメッセージや伝統を尊重してくれるはずです。でも、八五%の中国人がチベット仏教や文化に消極的な態度であったなら、問題は複雑です。

シム教授：ありがとうございます。あなたの笑い声、笑顔、そして全人類に対する楽観的なお考えにとても心ひかれました。ありがとうございました。



庭先での住職

ダライ・ラマ：ありがとうございました。



フェスティバル安穏――発信する墓・関係する墓

本稿は発行者の許可を得て『現代教化ファイル』七号より転載したものです。

シニアライフ研究所　りあもでんな　代表　岡　久美子

第十二回フェスティバル安穏（八月二十五日）は、妙光寺（新潟県日蓮宗）の新本堂で開催された。次のステップへ踏み出すために「安穏」が必要としたのは、数歩先を行く住職たちの実践を学び、全国の人々とさらなる関係性を結ぶことだった。

血縁から結縁へ

「安穏」の魅力は、後継ぎを必要としない永代供養の合祀墓安穏廟ではあるが、墓だけではここまでの成功はできなかった。フェスティバル安穏をはじめとする、多彩な人々の家族や血縁を超えた生前交流の充実が必須の条件である。

小川英爾住職が著作のあとがきで語っている。「現実は寺というしがらみと因習の中で、その限界を感じつつそれを糧に生きている日常だ。否定しきれないこの共同体のぬくもりと、一方で共存するその閉鎖性を解消し、新たな人の出会いと個別性を定着させたいとの思いを形にしたのが、安穏廟と言えるかも知れない」（「ひとりひとりの墓」より）。

少し乱暴だが、ここに集うメンバーを四種に大別してみた。まずは全国から馳せ参ずる僧侶たち。第四回、名古屋から初参加の夜に出会った、仏教や寺の現状を愁い明け方まで激論を交わす若い僧侶の姿は、葬式か

観光でしか出会わなかった僧侶に対する私の無関心を払拭してしまった。

次に安穏廟を購入した高齢の会員。その凛とした生きざまや発言は、人生の先輩として参加者に示唆を与えてくれる。会員同士も住所を教えお互いを訪問し合うなど、同じ墓に入る選択をした者同士、楽しい交流を深めている。

檀家も重要な役割を担っている。寺を住職を支えるが、ときとして拘束もする存在。十三年間の双方の努力の積み重ねが妙光寺の今を培っている。

さらに歴代パネリスト、ジャーナリスト、葬儀社社員、研究者、医療・介護に携わる人など、多種多彩な人々の一団が存在する。第一回から東京スタッフとして後援をしてきた「二十一世紀の結縁と葬送を考える会」もその一つ。代表の井上治代は、「十年間ずっと考えてきましたので、そろそろ行動をしようと会の名称を発展的に『エンディングセンター』と変えました。新本堂とともに歴史を重ねていきたい」と挨拶。「エンディングセンター」には、クリエイティブエンディングス、ナチュラルデスなど、世界、とくにアメリカやイギリスで考えられているオルタナティブな葬送の歴史や運動につながる言葉としての思いが込められている。

「安穏」という共同体で心が開かれ、結ばれた絆は、各々が地域や持ち場に帰ってからも、よりどころとなり活かされることが多い。

もちろん中心となる小川英爾住職が膨大な数の個々人と向き合い、誠実に関係性を結び、さらにその先で各々がゆるやかにネットワーキングをしている。

世の中にはこんな坊さんもいるのだ

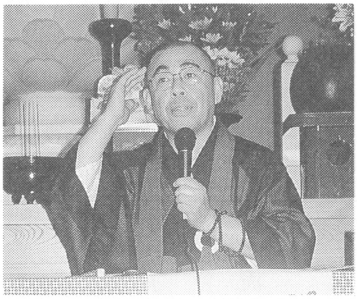
「新本堂が完成しましたので、今年は楽しくお祭り気分でやってみようと春から準備を進めてまいりました」。第十二回フェスティバル安穏「いま寺からのメッセージ～人々の生死を寺に託せるか～」は、参加者約二百五十名への小川住職の晴れやかな挨拶で始まった。

境内にはパネラーの著作だけでなく、作務衣や会員手作りの袋物なども並び、「和顔施」と題した家族の肖像写真展も併催されている。

司会者も含め、一人で講演が打てる逸材が七人も並んだパネルディスカッション第一部「寺からのメッセージ」。司会は『SOGI』編集長碑文谷創、全国の動向を熟知したコメントでつながれた各活動の紹介からは、住職の自己決定とそれに伴う寺の役割が見えてくる。

高橋卓志　松本　神宮寺　臨済宗　住職

自らを〈皆の宗〉と呼ぶ高橋住職。「浅間温泉という、ひなびた地域に住む人々の抱えるさまざまな課題を受け取りながら、その解決に努力をして社会的な存在としてありたい」と。チェルノブイリ支援など具体的な活動は多岐にわたる。



① 尋常浅間学校は月一回の授業を十三年間続けている。校長は永六輔、教頭は無着成恭、小番が住職。教師は筑紫哲也など九〇名余り。七月のピーコと在宅ホスピス医の内藤いづみと高橋のターミナルケア講座では、ピーコが左目をガンで摘出するときの生命ぎりぎりの話をしてくれた。

② 温泉旅館を経営する老夫婦から、「土地も建物も温泉の権利もすべて提供するから高齢者の施設を作ってほしい」との相談があった。宅老所なのかホスピスなのか……医師・弁護士・建築家など、お寺の豊富な人的ネットワークを活用して組織作りをしている。

③ 「意思確認書」を作成、生前の本人の意思を尊重したお葬式を実現している。毎回異なるイベントを組み立てるのは大変だけれど、亡くなった方にとっては一生に一度の大切な儀式。永代供養墓「夢幻塔」も建立、その延長線上にNPO法人ライフデザインセンターの設立（二〇〇一年長野）もある。

草野栄應　東京　明治寺　真言宗　住職

「寺は器、ニーズに応えようとしているうちに営みが現れてくる」。多くの僧侶を取りまとめられるのは、そのあたたかい人柄の故か。

① 各宗派の僧侶九〇人が交代で電話相談を受けて十八年、「仏教情報センター」事務局長を務める。「仏教テレホン相談十万件の中身　寺と僧への世間の期待と批判・苦情」を出版した。寺に対する苦情もいっぱい。お寺はこうあるべきとの期待があるから不満もでる。

② 「仏教ホスピスの会」では深刻な病をもつ人とその家族が月一回一堂に集まり、「どうして私だけがこんなことに……」という孤独感からの解放をめざしている。病気だからこそ見えてくる生命を照らし合いながら。

③ みんなで入りみんなで供養する合祀墓「多宝塔」ができたら、義務としてではなく、参加する喜びとしての供養が自然にできてきた。家族や友人の記憶を分かちもつ人同士の人間関係、自己の存在証明の再確認や人生の店じまいへの勇気づけなど、双方向性の活動が始まっている。

秋田光彦　大阪　應典院　浄土宗　住職

「参加すること協働すること、誰もが支え合いながら、それぞれの人生の主人公をしっかり務めることができる社会と関わることがお寺の役割」徹底的に一緒にやろうということを姿勢として打ち出している。住職よりプロデューサーと呼ぶ方がふさわしいようだ。

① 一九九七年本堂が劇場になっている、お葬式をしない寺を建立。日本初の檀家制ではない会員制の参加型寺院。お葬式・戒名・お墓の仏教三点セットを否定はしないが、ちょっと脇に置いた。生身の人間の生き方としての仏教、人間が関わり合う場所としてのお寺を考え直そうとの提案だ。いまでは年間四十本以上、演劇やコンサートなどのいろいろ

な催し物が開催されている。「ガンとともに生きる女性への応援笑」や「閉じこもり・ひきこもりから　なぜ立ち上がれるのか」など、さまざまな生命のただ中にいる方の問題を取り扱っている。

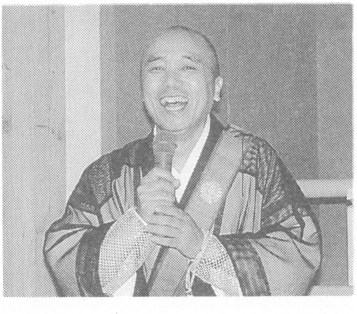
② inochi - club.comのホームページを六月末に試験的に始めた。出会うはずのない人が出会う力強さ、可能性を探りたいと。家族や友達だから生死の問題を素直に語り合えるとはかぎらない。市民の意見や考えを救い上げる仕組みを作ろうと意欲的だ。

小川英爾　新潟県　妙光寺　日蓮宗　住職

まずは足元の問題解決を地道に継続しつつ、安心して人生のけじめをつけられるように、たとえば「安穏共済」などの新しいメニューを用意していこうと考えている。

① 「安穏廟」を一九八九年開設。会員は四〇八件で、県内が六七%。一人あるいは夫婦のみの世帯が六〇%を越す。安穏基金は一億七千万円、基金収入は来年から八百万円になる予定。現在四百三十二区画のうち十数区画が残るだけに。樋口恵子・新藤兼人・柳田邦男氏らを招いて老いや死をテーマにしたパネルディスカッションと安穏法会などを一泊二日で行う「フェスティバル安穏」を毎夏開催。

② 二〇〇一年新本堂落慶。歴史ある本尊を変え、わかりやすい釈迦像を安置。来年からは経理を公開する予定。住職は六十歳で定年退職、新住職は檀家による採用試験で……と、新しい寺のあり方を実践し続けている。



村田幸子　ＮＨＫ　解説委員

介護の先にある死を見つめていかなければ安心して老いてゆけないとの実感をもつようになる。

① 寺をどうするのか意思決定をする魅力的な住職が必要。個人の魅力が寺の運営には欠かせず、地域住民を惹きつける要因と痛感した。

② 寺の役割とは何か。寺は地域社会の核になりうる社会資源。住民側の参加意識も同時に育っていくことが重要。

③ 宗派を超えた連携、ネットワークが求められる。地域で元気に活動されるお坊さんの存在を知ってうれしい、が同時に全国八万ケ寺のほんの一握りであることを知り残念。皆の宗で地域社会に新しい寺のあり方を問い直していく活動を全国に発信してほしい、と要望。

妻たちの自分探し

第二部では、「高齢社会と寺、そして女性」がテーマである。僧侶を支える裏方としての役割を強いられている妻たちの、自我の確立について井上治代が本音を引き出していく。

「どうしたら夫婦で寺を留守にできるのか聞いてきて」と言われた草野栄應さんの妻以外は、全パネラーの妻たちが「世界の平和は家庭の不幸か」「離婚をせずに今日に至っている理由は」に応えてくれた。

高橋正子さんは、一九九九年頃からタイのＨＩＶ患者と地域の自立支援の活動「アクセス２１」に携わり、初めて自分の考えで仕事に関わる機会を得た。タイと日本を往復して、女性たちの共同作業を支え、仕上った作務衣を日本で販売する活動だ。「タイで苦労を重ねているのも女性、私も子どもを抱える母親なので共通点も多くあり、私が存在する意味も作り出してくれる」と感じ始めている。

秋田みどりさんはカウンセリングに出会い、自分のことやお寺のことが見えてきたと言う。学習する中で「あ、仏教で言うこれって、ひょっとしたらこのことかな」と気づかされるようになり、自我も強くなった。本寺(大蓮寺)の寺庭夫人の役割と應典院のそれとはまったく異なり、掛け持ちなのでいまでも悩みはつきない。

小川なぎささんは会報「妙の光」に、自分の本当の気持ちを書くことで自分を見つけていった。これまで

にも五十回くらい家出しようと思ったことがある。しかし、「おめえが追い出されたら俺も檀家辞めるわ」と言ってくれた檀家の言葉がいちばんの宝物だそうだ。「住職は好きにやってもらってかまいませんので、私は私で皆さんとお話をする中で育てられ、あたたかくしみじみとお茶の間のような形を大切にしていきたいです」と。

裏方だけではなく、一緒に寺を運営し妻も自己実現をはかり、よりよいパートナーとして生きる力強い姿勢が、寺の活動をもイキイキと支えている。

法要と宴、安穏甚句の復活

夕方の安穏法会は、読経とシンセサイザーの合奏が角田山の山ふところに荘厳に響き渡った。浴衣姿の子どもたちと一緒に参加者も献花。鬼籍に入った人と各自が心静かに対話をするひとときだ。

懇親パーティーでは本堂前のデッキで百五十名が飲み、食い、歌い、踊った。角田浜に古くから伝わる民謡を編曲した「安穏甚句」が、檀家の太鼓や合唱や踊りが宴を賑やかに盛りあげ、参加者も一緒に踊った。これまで裏方に徹していた檀家と会員やスタッフが一つに解け合う気持ちのよい時間と空間がもてた。

今回のフェスティバルは一日のみ、翌日の参加者とパネラーが車座になっての話し合いはなく、参加者は来年の再会を愉しみに妙光寺を離れた。

番外編　ネットワークの可能性を探る

「フェスティバル安穏に、葬送に携わる多くの人々が全国から集まったのだから、せっかくの機会を活かしましょう」との呼びかけに応えて、有志が翌日本堂に集まった。

北からは札幌市の葬送を考える市民の会やNPOサポートセンターが、首都圏エンディングセンター、横浜のギャラリー葬送博物館準備室、長野のライフデザインセンター、南は九州のこれからの葬送を考える会など、全国の関係者四十名余りが「ネットワークの可能性」について忌憚なく意見を交換し合った。

市民からは、老いの安心をサポートするには、一カ

所ですべてが網羅される専門性をもつ人の集団の必要性が訴えられた。

生前予約（方向性を示す程度）あるいは生前契約（死後も法的拘束力をもつ）に関する信頼性の確保には、施行業者ではない評価を専門にする第三者機関が必要との声も多い。

ＮＰＯが、アウトソーシングの受け皿として多額の事業を請け負えるようになってくると、ミッションより利益を優先する法人も出現。ＮＰＯセンターにはインキュベーターとしてだけでなく、事業の継続性と公正性を担保する評価機能も求められている。

一九八〇年代からネットワーキングの努力をしているが、近親憎悪が理由で成功していない。どんな形でも個性的なモノを出していきながら、柔軟に信頼関係ができるところだけつながればいい。生前契約もシステムだけでなくデス・エデュケーションを醸成する住職の意思も必要だ。

僧侶への「宗派は超えられるのか」との問いかけには、単立化や師弟の養成や二重僧籍について議論が白熱した。宗派を超えることは宗派を否定することではない。同心円を描いて宗派の属性と脱宗派の関係を取りもつ往還の関係ではないかとも。「お坊さんサミット」への参加の呼びかけなどもあった（十月十三日神宮寺にて）。

お寺だけががんばればよいのではなく、趣旨に賛同して宗派を超えて集まった人たちの協働作業。「あなたの生死を寺に託せるか」と同時に、その寺にあなたは本当に責任のある参加ができますか、と各々の自己決定も問われている。

井上治代からの提案、「既存のシステムが制度疲労を起こしている中、社会を変えよう、あるいは代替システムを作ろうとする人がゆるやかに情報交換をする場」としてエンディングセンターが名乗りをあげ、参加者が賛同をして会を閉じた。安穏廟から、一人ひとりが網の目のように触手を多数伸ばして結び合う、ゆるやかだが切れにくい、情報の受・発信装置が誕生した。

行事案内

お札配り

十二月に入り、来年のお札を持って、住職と鎌田が手分けして各家へお経に伺っています。予定が立てにくく事前にお知らせできませんが、お電話いただければご都合に合わせます。

大晦日　除夜の鐘

大晦日夜十時半から除夜法要。引き続き十一時四十分頃から除夜の鐘をつきます。どなたでも先着順に一回ずつついて、その後、縁起物が当たる抽選があります。新本堂と境内のライトアップも見事ですので、家族揃ってお出かけください。古いお札を燃す「お焚きあげ」もありますので、お持ちください。

元旦　年始参り

元旦の朝九時ころから午後四時頃まで、年始参りの受付です。新年は妙光寺の本堂から始めましょう。

年回忌のお知らせ

平成十四年に年回忌のあるお知らせは、お札配りの際お持ちするか、郵便で直接お届けします。

「星祭り」祈願

来年一年の家内安全、健康、幸運を祈願する家族ごとの「星祭り」は一軒二千円です。新規の方のみ年内にお申し込みください。

とき・あが

本来ならいつもの「妙の光」を別に発行すべきなんでしょうが、手間と経費がかかるので特別号だけにしました。内容が日常的でない、難しい、という感想もあるかもしれません。たまにはこういうことも、でご理解ください。

先号で、判の大きさがこれでいいかお尋ねしましたら、おひとり以外多くの方から現状でいいとのご意見がありました。理由の詳細は省きますが、今後しばらくは悩まずにこのままいきます。

事務多忙でやるべきことが延び延びで、気がかりなまま年を越しそうです。どうぞ来年も宜しくお願いします。良いお年をお迎えください。

小川